

観光都市長崎から周縁化する「浦上」について

A Study about Urakami, marginalized area from Nagasaki city

羽生敦子* [立教大学観光研究所・研究員]
HANYU, Atsuko

*白百合女子大学言語・文学センター 研究員

Abstract: There is a lot of contents for sightseeing in Nagasaki concerning the theme of the end of the Edo period, such as Dejima, Glover Garden, and Oura Catholic Church. What tourists expect would be European exoticism. Nagasaki Saruku, which is held from 2006, prepare several tourist walking courses whose theme is very various. In the 2020 New Year program, Saruku course was developed to the Urakami Story. You can walk around the atomic bomb-related area from Urakami Cathedral with a local volunteer guide. It is not only for enjoying the theme of peace, but also the theme of Urakami as a Christian village. Walking at Urakami area, you can find several Lourdes which are even unknown to the residents. The Lourdes reminds you the missionary of Paris Foreign Mission (MEP) settled in the end of Edo.

In 2018, the assets of Hidden Christian Sites in Nagasaki and Amakusa Region were registered as World Heritage Site. It can be read as a 260 years life history of the hidden Christians which ends at Oura Catholic Church, place of its discovery. However, it does not include assets related to Christians in the Urakami area. Oura Catholic Church in the Minamiyamate district, which symbolizes the exotic atmosphere of Nagasaki has become also a climax place in the World Heritage Site. In this paper, I forced on Urakami and unraveled the memory of that land, which was socially and culturally separated from Nagasaki City, analyzing from academic papers and literary works.

Keywords: 浦上 (Urakami), 長崎さるく (Nagasaki Saruku), ルルド (the Lourdes), 世界遺産 (the World Heritage), 土地の記憶 (Genius loci)

I はじめに

II 浦上天主堂

III パリ外国宣教会と「信徒発見」

1. パリ外国宣教会のフランス人神父

2. 「信徒発見」

IV 分霊化するルルド

1. フランス・ルルドのマリア
2. 日本へと伝播したルルドのマリア
3. 長崎のルルド
4. 浦上のルルド

V 長崎さるく

VI 浦上と長崎の分断

1. 長崎との分断
2. 2つの世界遺産から外される「浦上」

VII 文学作品にみられる「浦上」のかたり

1. Aki Shimazaki の Tsubaki
2. 遠藤周作の『女の一生』第一部キクの場合
3. 青来有一の『聖水』

VIII おわりに

I——はじめに

長崎観光のコンテンツは豊富である。鎖国時代に唯一海外との窓口であった出島、オランダ人やアチャさんと呼ばれる中国人との交流史から、花街・丸山の賑わい、坂本竜馬など歴史的人物を迎える旅などさまざまなテーマがあり、長崎市公式観光サイト「あっと長崎」では、47のコースが提案されている¹⁾。

幕末の長崎は開国を目前に西洋諸国が狙う日本市場(それは体制においても経済においてもキリスト教の布教においても)の試金石としての長崎であり、グラバー園、新選組関連施設、大浦天主堂などは人気スポットであり、外国人居留地(南山手地区)は幕末の異国情緒を象徴する場所である。

2018年世界遺産『長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産』に登録された資産でもある大浦天主堂は、西洋諸国との交流の象徴に限らず、「信徒発見」の場として長崎のキリシタン史のクライマックスとしての象徴の場となり、多くの観光客を引き付ける。

一方で16世紀に平戸のキリシタン大名大友純忠(1533-1587)によってイエズス会に寄進された土地、長崎市の北部に位置する浦上地域は観光の場に登場することはなかった。浦上が知名度を得たのは図らずも、「原爆」という悲劇であった。「原爆の地」という記号が浦上に定着して以降、「キリシタンの里」としての浦上の記憶は爆風とともに消えてしまったのかのようである。本稿では長崎市浦上周辺の土地の記憶を掘り起こし、長崎から周縁化された浦上について考察を行う。調査方法として、現地調査、文献調査、文学作品からの語りを使用する。

II——浦上天主堂

長崎は1945年8月9日「原爆」をいう広島に次ぐ世界で二番目の被害を受ける。原爆は「長崎」の中心地ではなく、中心地から4〜5キロほど離れた「浦上」に落ち、当時東洋一の尖塔を持つと言われた浦上天主堂は崩れ落ちた。吹き飛ばされ、巨大な石の塊と化した尖塔が現存する唯一の遺構として教会の側面に横たわる。2006年に始まった「長崎さるく」では「アンジェラスの鐘の丘を訪ねて」としてようやく浦上地域のまちあるきが提案される。原爆資料館、爆心地、2020年のNHK朝ドラ「エール」で俳優吉岡秀隆が演じた永井博士の書斎であった如己堂(永井博士記念館)、平和公園をめぐるコースである。このコースは、被爆地長崎・浦上を知る(学習)するものであるが、永井博士という人物を通し、キリスト教が暗示される。医師である彼は、原爆で妻を亡くし、自らも被爆しながら医学研究を続けた。一方でキリスト教の「愛」を唱えた人物であり、浦上の悲劇の象徴となった人物である(図7)。彼の作詞による「長崎の鐘」は日本中でヒットし、彼の名は日本中で知れ渡った。彼がキリスト教徒になったことと浦上は無縁ではない。原爆でなくなった妻、緑の一族(森山家)は

浦上カクレキリシタンであり、帳方²を務めたほどの熱心な信者であった。浦上はカクレキリシタンの土地であり、原爆で崩れた初代の浦上天主堂は、迫害を受け配流され、のちに浦上に戻ってきた潜伏キリシタンたちが献堂したマリアの家であった。

本稿では、260年間隠れて信仰していた人々をカクレキリシタンと表記し、信徒発見の後、カトリックに改宗したものを潜伏キリシタン、カトリックに改宗せず、明治に入り禁教が解けた後も信仰を続けた人々を「隠れキリシタン」と表記する。隠れキリシタンは本来のカトリックとは異なり、土地の習俗なども影響した独自の信仰文化を形成している。

III——パリ外国宣教会と「信徒発見」

1. パリ外国宣教会のフランス人神父たち

16世紀、イエズス会のザビエルの来日(1549年8月15日に鹿児島到着)を機にキリシタンの歴史は始まるが、19世紀後半、アジアでカトリック布教を行っていたのは、パリ外国宣教会(Missions Étrangères de Paris)であった。開国前には、すでに沖縄(琉球)でフォルカード神父(Forcade, Théodore Augustin, 1816-1885)³が布教活動を行っていた。1858年日仏通商条約が締結されると、日本への入国が可能になり、パリ外国宣教会に属するフランス人神父たちが横浜、次に長崎で布教活動を始める。その後、ロケーニョ神父(Josephe-Marie, Laucaigne, 1838-1885)やフューレ神父(Louis, Furet, 1816-1900)やプチジャン神父(Bernard Thaddée Petitjean, 1829-1884)⁴が来日を果たす。しかし当時はまだ禁教の高札はまだ廃止されておらず1864年に長崎に着任したプチジャンは居留地に住むフランス人のための司牧(司祭と異なり、礼拝やミサを執り行うことはできない)としての役割に過ぎなかった。その後、フランス

人のための教会建設の許可を得て建てられたのが大浦天主堂(1865年2月15日完成)である。パリ外国宣教会からは多くのフランス人宣教師が来日して艱難辛苦したが⁵、長崎観光のフレームでは「プチジャン神父」と「大浦天主堂」だけにライトが当てられる。その原因とされるのが1865年3月17日の「信徒発見」である。

2. 信徒発見

1865年2月、長崎では東山手に大浦天主堂(フランス寺と呼ばれていた)が竣工した。その1か月後の3月17日キリシタンの女のグループがフランス人宣教師プチジャン神父と出会い、信仰を告白する。これが、いわゆる「信徒発見」といわれる事件である。この「信徒発見」というクライマックスを導いたのは、浦上に住むカクレキリシタンの女性たちであった。彼女たちは、「サンタ・マリアのご像はどこ?」「同じ御心です」と告げ、プチジャンらを驚愕させ、喜ばせた。

IV——分霊化するルルド

1. フランス・ルルドのマリア

フランスでは、1789年のフランス革命の後、カトリック教会の権力は財産没収もあり、脆弱なものになった。その復活を狙うように、「マリア出現」が相次いだ。1830年、パリのバック通りのマリア出現はカトリーヌ・ラブレ(Labouré, Catherine, 1806-1876)⁶による目撃、ラ・サレット(1846)における子供たちによる目撃、ルルドのマサビエルの洞でのベルナデット(Soubirous, Bernadette, 1844-1879)による目撃(1858)、ポンマンの子供たちにおける目撃談(1870)などは特に有名で、今日も巡礼者(観光者)が絶えない。とりわけ少女ベルナデットがマリア出現に立ち会ったルルド(マサビエルの洞)は、観光(巡礼)地とし

てパリに続く地位にあり、2019年には年間600万人が訪れた。⁷ベルナデットのマリアの目撃譚は、当時、幻視なのか狂言なのか、宗教関係者、医学関係者、警察、司法関係者から議論されてきた。彼女が立ち会ったマリアは「無原罪の御宿り」Immaculée conceptionと自らを名乗った。マリアという単なるイエスの母であった存在が「無原罪の御宿り」として神聖化し、ピウス9世により教義化されたのは1854年、ルルドのマリア出現のわずか4年前であった。ルルドの事例以降、マリアは単独、つまりイエスを抱かない独立型「聖母マリア」として信仰対象化する。

2. 日本へと伝播したルルドのマリア

ルルドの「マリア出現」は1858年、「信徒発見」は1865年に起こった出来事である。カトリック教会は、2つ目を東洋の奇蹟とみなした(蜷川、2016)。パリ外国宣教師たちの多くは1860年以降に来日している。かれらは1862年にタルブのローランス司教(Bernard-Sévère, Laurence, 1790-1870)⁸によって「奇蹟」と承認されたルルドでの奇跡譚とマリア出現に関心を寄せていたと思われる。⁹

池田(1968)によれば、1863年に来日したロケーニョ神父がルルドの出来事についてキリシタンに話したことが伝えられる。¹⁰また外海地区で活躍したド・ロ神父(Marc Marie de Rotz, 1840-1914)¹¹が建てた出津教会には表門に、マリアの像が建つが、「ルルドの聖母マリア」と記されている(図1)。また外海歴史民俗資料館には出土品が展示されているが、「無原罪の聖母」と掲示されたプラケット(スペイン製)が数点あり、ド・ロ神父が持ち込んだものと考えられる。

一方で大浦天主堂に出現した浦上のカクレキリシタンの女性たちが、その内陣でみたマリア像に自分たちと同じ御心を読むが、そのマリアは幼子イエスを抱くものであり、ルルドのマリアとは異なる。遠藤周作(2016初版は1971)も『切支丹の



図1 出津教会の「ルルドの聖母マリア」(2021年11月2日筆者撮影)

里』で言及しているが、イエスの像に対してマリア観音の数は多い。潜伏期間中もマリアへの信仰が強かった信徒(カクレキリシタン)であったが、カトリックへと改宗した信徒(潜伏キリシタン)たちに、「無原罪の御宿り」を教えたのは、ルルドの奇蹟を知るフランス人神父たちの働きによるものである。¹²

3. 長崎のルルド

竹田(2019)が述べるように、分霊として全国各地の教会協や、カトリックのミッションスクールの園庭にルルドは存在する。長崎県のルルドを調査した関根(2016)の論文からもルルド様式は様々であることが分かる。¹³関根は長崎県にある29箇所のルルドを調査し、教会付属の日本のルルドが長崎県に集中していることを示す。五島列島においては29の教会がありそのうち12にルルドが設置されている(鯛の浦教会、中の浦教会、曽根教会、米山教会、猪ノ浦教会、頭ヶ島教会、井持浦

教会、水の浦教会、三井楽教会、浜脇教会、福江教会、奈留教会）。長崎市をみると浦上地域に多い。カクレキリシタンの住んだ地域という特性もあるが、フランス人宣教師が布教活動を務めた土地であったことに起因するのではないか。¹⁴ かれらは、フランス・ルルドでのマリア出現の奇蹟を大浦天主堂での「信徒発見」という奇蹟に対応させているのではないか。つまり、ルルド設置により信徒の住む「浦上」での奇蹟を望んだのではないか、との仮説がうまれる。分霊的な、あるいは記念碑的な教会脇のルルドでの奇跡譚や物語は確認できていないが、浦上のルルドは、長崎版ルルドとして、記念碑なルルドとは一線を画すものがある。以下に本原ルルド、本河内ルルド、小峰のルルドを紹介する。

4. 浦上のルルド

(1) 本原のルルド(図2)

戦前から湧水があり、被爆当時はその水を求めて多くの被災者が訪れた。1954年5月、本原ルルドとして整備されたルルドである。

【戦前のかたり】

「…雑木がよく茂っているのです、その林の下側に泉が湧く。冷たい、良い水が出る。本原

付近の人々は、その泉を『末期の水』と呼んでいた。これまで病人が重症になると、この水を飲ませる習慣があった。」

【原爆後のかたり】

「丘に向かって川に下りていくと、そこで私は驚くべき光景にであった。半裸か、あるいは全裸に近い人々が、水ぎわにしゃがみこんでいる。男も女も、年老いた人も、ほとんど区別なく同じように見えた…さきほどの白い亡霊の列がここに、川の水辺に集まったのだ。」

(秋月辰一郎「被爆医師の証言 長崎原爆記」¹⁵より)

しかし、現在は宅地開発のため水脈がなくなり水は存在しない。

(2) 小峰のルルド(図3)

フランシスコ会修道士ヨゼフ岩永氏が、原爆によって精神的、肉体的に打撃を受けた人達の心の支えにと、浦上にルルドを建造する計画を立て、三原町野中の北西急傾斜地の下方に、昔から清水の流れ出る最後水と呼ばれる地に実現したもの。着工は昭和14年10月ヤブを切開き、鍬を振っての



図2 本原のルルド(2020年3月筆者撮影)



図3 小峰のルルドのマリアとベルナデット(2021年11月3日筆者撮影)



図4 小峰のルルド 礼拝所(2021年11月3日筆者撮影)



図5 本河内ルルドのマリアとベルナデット(2020年3月筆者撮影)

地開き工事が着工した。

【場所の選定理由】

洞窟の正面には大きくうねった川が流れ、当時、対岸には牧場が広がっていて、本場のルルドを縮小した環境の最後水は、建造にふさわしい適地と考えた。元々最後水にも昔から数々の逸話やいわれがあったのことも選定理由のひとつ。すべて手作業にて岩盤を削り、洞穴を掘り、石組を築いた。工事開始から約6ヶ月、昭和25年(1950)5月、小峰のルルドは完成し盛大な式典が行われた。その後も、在世フランシスコ会員によって守られ、毎年2月11日のルルドの記念式典(ベルナデットがマリア出現にはじめて立ち会った日)は現在も続けられている。この地は現在でも多くの信徒が心の拠り所とする聖地。湧き出る清水は一度も絶えることなく潤し続ける。¹⁶

現在は住宅に囲まれた一角であるが、フランシスコ会によってきれいに整備されている。

(3) 本河内のルルド(図5)

パリ外国宣教会のコルベ神父(Maksymilian Maria Kolbe, 1894-1941)(図6)と永井博士(図7)の2つの語りが演出される。ポーランド出身、ルルドの奇蹟を現地で体現しているコルベ神父は日本での「ルルド」建設を切望し、水源地であった本河



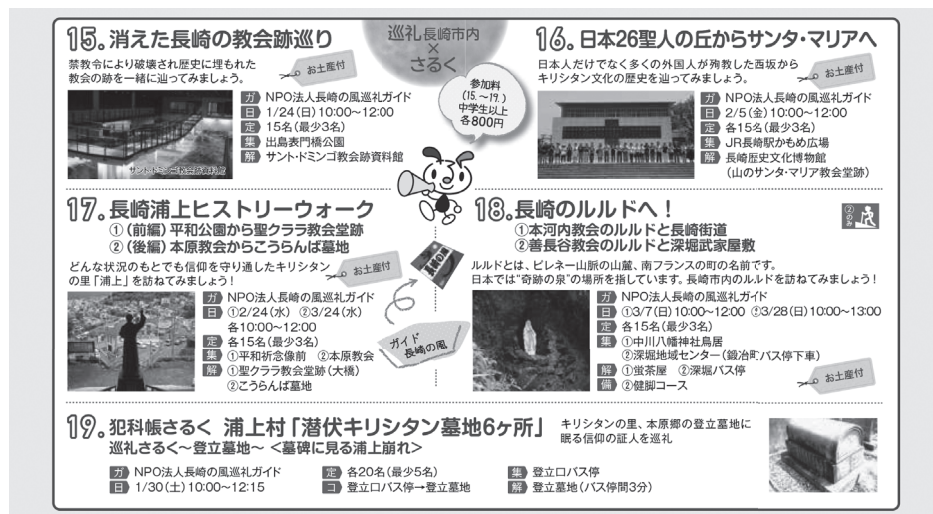
図6 コルベ神父(2020年3月筆者撮影)



図7 永井隆博士

内に教会を建設したと言われている。1936年ポーランドに帰国するが、のちにアウシュビッツに送還され、そこで身代わりとなって餓死刑となった。後に聖列された「聖人」である。

原爆で妻を失い、自らも被爆し、その苦痛の中で上梓した『長崎の鐘』の著者として知られる永井



隆博士が本河内ルルドの水を飲み、原爆の傷を癒したという奇蹟を授かった。

V——長崎さるく

図8は「長崎さるく」2020年新春号のプログラムの一部である。ここに掲載した16を除いて15から19まではすべて「浦上さるく」である。NPO法人長崎の風巡礼がガイド役を担っており「巡礼地」としての浦上が観光の文脈の中で語られる。17ではキリシタンの里「浦上」の探訪、18は長崎のルルド探訪、19は最大の悲劇であった「浦上四番崩れ」関連墓地の探訪がテーマとなっている。筆者は2021年11月の現地調査でいずれかに参加希望であったが、コロナ禍ということで15から20のプログラムは不開催であった。後日、NPO法人長崎の風巡礼ガイド宛てに18に関してこれまでの参加者についてメールで問い合わせたところ、地元からの参加者が多く、その理由は「浦上について」あるいは「浦上のルルド」について知らなかったからということであった。当初はスピリチュアルなものを求めてローカル以外の参加が多いのではない¹⁷かと予想していたが、予想に反した結果で

まず、「浦上」がもつ土地の記憶が、Urakamiとして世界に発信できない理由がある。浦上は長崎市の単なる一区域であると、おそらく長崎に土地勘のない、観光旅行者にとっての認識であろう。しかし「浦上は浦上であって長崎ではない」という社会通念が長い間存在した。たとえば、それは原爆という悲劇を語るときも、長崎では、「原爆は長崎ではなく浦上に落ちた」と区別されてきた。むしろ差別された土地の記憶がある。明治9年生まれだったガイドの祖父は「浦上なんて行くところではないと蔑んでいた地域だった」とのことである。

1. 長崎との分断

森(2008)は「長崎」という原爆の投下場所内に包されながら長崎とは一線を画す浦上について、つまり長崎との分断について地理的要因、宗教的要因、社会的要因から分析を行う。

「浦上」という名称の由来は、長崎港に深く湾入し、深江の浦と呼ばれて居たその「浦ノ上」に存在する地区を意味するものである。現在でも長崎市北部一帯を示す名称だが行政区間ではない。この深江の浦を一部とする長崎湾が現在の形に整備されたのは1904年で、これ以後南北地域の往来が容易になった。¹⁹つまり、浦上地区は明治以降に発達した地区である。もともと、本原・中野・家野・里・馬込の5つの郷から構成される里山地域であり、織豊政権時代から、馬込郷以外はキリシタンが居住していた(図9)。「潜伏の時代」には長崎奉行により厳しい弾圧があり、信徒たちは「崩れ」とよばれる検挙事件にあうが、最大の悲劇は1867年4月5日の「浦上四番崩れ」であった。この背景には、

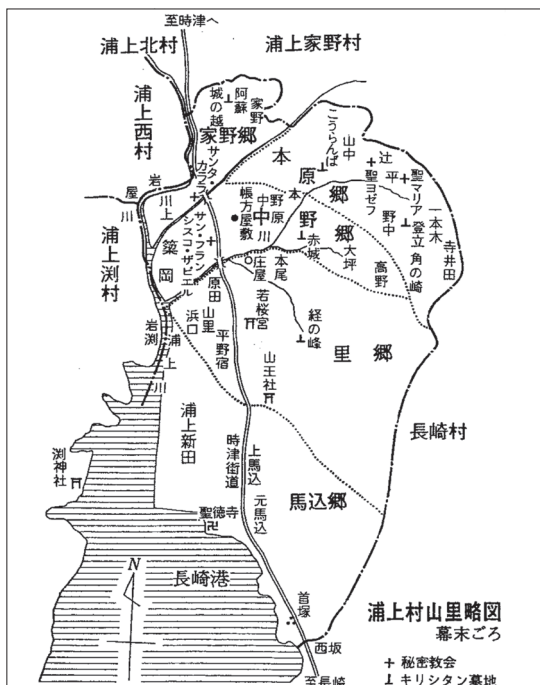


図9 幕末頃の浦上村山里略図，片岡（1963）より引用

浦上の信徒が大浦天主堂に赴きプチジャン神父にキリシタンであることを告げたことにある。禁教令の高札が撤去されるのは1873年2月24日のことであり彼らの行為は弾圧するに値した。萩、津和野をはじめとして金沢あたりまで配流され、狭い牢獄に詰められたうえ厳しい罰が与えられていた。潜伏キリシタン側では「旅」と呼ぶが、旅から帰還できた者は、廃村化した浦上で、1895年から30年の歳月をかけて「マリアの家」としての浦上天主堂を築く。もともと庄屋高谷があった場所であり、毎年踏絵という、表向きではあるが裏切り行為が繰り返された場所であった。謝罪を込めてこの庄屋跡地での献堂を希望したと言われる。²⁰キリシタン地区としての浦上の記憶がこの天主堂に集約される。

さらに、浦上には被差別部落としての土地の記憶がある。浦上村山里は、家野郷、本原郷、中野郷、里郷、馬込郷で構成された地域であったがこの5つの郷のうち、馬込郷だけは非キリシタン村であり、被差別部落民の居住地域であった。もともとはキリシタンであり旧市街地の「かわた町」に住む皮革職人たちであったが仏教徒に改宗させられた上、浦上に強制移転させられたのである。長崎では、部落民はキリシタンを監視し捕縛するという権力の末端組織として利用されていた。ここから馬込郷とほかの4つの郷の対立関係が見えるが、その様子は後述する遠藤周作の『女の一生』のなかでも描かれる。

2. 2つの世界遺産から外れる浦上

2018年長崎は、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」として世界遺産の資産として登録された(図10)。2018年に登録された長崎の世界遺産資産で理解するのは、ザビエルに始まるキリスト教の布教から禁教まで260年間密かに宗教を守り続けたカクレキリシタンたちの歴史(生活史)であり、「信徒発見」というクライマックスがハッ

された。筆者にとって印象的な語りであった。²¹

VII——文学作品にみられる「浦上」の語り

本研究ではAki ShimazakiのTsubaki、遠藤周作の『女の一生』、青来有一の『聖水』を参照し「浦上」がどのように描かれているのかについて考察を行う。

1. Aki Shimazaki のTsubaki

Aki Shimazaki(1954-)はカナダ・ケベック州の日系人作家である。岐阜生まれ。1980年にカナダのバンクーバーに移り住み、1991年からはフランス語圏のケベック州在住の女性作家である。母国語である日本語ではなくフランス語で小説を発表している。日本の小説、むしろ日本語で書かれる小説では扱いが難しい問題とされる日韓問題や、第二次世界大戦のかたまりをフランス語で躊躇することなく率直な表現で綴る。彼女はUragami²²を作品の中で登場させる。

処女作であり代表作Tsubakiでは、主人公を、長崎の中心地区ではなく浦上に住まわせている。Nagasakiは世界的に有名な場所であるが、Uragamiを長崎の「ソト」としてフランス語圏読者に知らしめたことに価値があるのではないかと。

Shimazakiは、ケベック社会で認められた作家であるが、移民という「ソト」の存在である。また日本で生まれ、日本語を母語としている作家であるが、カナダ国籍を取得しており、日本でも「ソト」の存在である。「ソト」の立場をうまく利用し、日本の近代史を主観を含めて自由に「小説」の中で語る。Tsubakiでは主人公(Yukiko)が孫(ハーフかクォーター)に長崎の原爆は「教会の前(浦上の)」に落ちたことを教える。そして、なぜアメリカ人はプロテスタントにもかかわらず、キリスト教会に原爆を落としたのかという質問を孫に発言させる。そこで、主人公は、カトリック信徒の友人の



図10 長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産(『日本経済新聞』, 2018年6月30日配信)

ピーエンドとして完結するストーリーである。

「浦上四番崩れ」をはじめ信徒発見以降も続いた弾圧、それらの悲劇を象徴する浦上天主堂が資産として登録されることはなかった。

さらに、浦上は原爆の被災地でありながら、被災地としても広島に次ぐ。それは二番目という順序だけではなく、被災あるいは悲劇の場としての遺構となるべき浦上天主堂を失ったことが大きい。広島が「原爆」という記号を唯一担うかのような構図となっている。Nagasakiに内包されたUragamiは忘却されてしまう可能性もある。長崎さるくのガイドの話の中で、戦争直後、浦上天主堂の一部保存の方法もあったが、おそらく政治的圧力によって実現しなかったこと、今でも一部の住民の間では語り続けられていることが知ら

話を回顧する。彼女は「アメリカ人はキリスト教徒だから、空から十字架を見たら、爆弾を落とさないで飛び去るわ」と信じていたけど、「Pour eux, les Japonais sont des japonais. 彼らにとって日本人は日本人なのよ(キリスト教徒であろうとなかろうと日本人にすぎないのよ)」と答える。父親の仕事の関係で、当時浦上に住んでいた主人公は人生の終わりに遺書として子供に手紙を残す。その中で父親の殺害を告白する。それは原爆投下の早朝のことであり「殺害」は原爆によって「秘密」になってしまったことが明らかにされる。浦上、原爆、殺人をUragamiに組み込む。現在、『秘密の重み』*Le Poids des Secrets*としてTsubaki, Hamaguri, Tsubame, Hotaru, Wasurenagusaの5編が収録され、関東大震災から第二次世界大戦を経て1970年代くらいまでの日本の近現代史がそれぞれの家族の視点で語られる。Tsubameの主人公は在日朝鮮人女性である。そして、Tsubakiで「殺害された父親」に無理やり愛人にされた女性でもあった。作者は彼女の夫の仕事の転勤先を長崎としながらも、やはり住む場所をUragamiと設定する。Yosomonoとして、つまり「ソト」として生きる女性を描く。東京出身、在日朝鮮人、浦上の三重の「ソト」を作り上げる。

Tsubakiの中で、主人公Yukikoが浦上に引っ越すことになった時の様子(拙訳)を紹介する。

原爆投下の2年前、私たちは 父の仕事の関係で長崎に引っ越しました。父は東京の大手の会社の研究所で働いていましたが、じきに満州へと転勤する同僚の後任者として、長崎支社への転勤を命じられたのです。長崎市内で3か月暮らした後、父は、今の家よりもよい新しい家を見つけたと言いました。その家は、今住んでいるところから3キロほど離れた浦上谷(la vallée d'Uragami)の小さな地区にあるということでした。

母は退屈そうに、

—— どうしてまた引っ越しなのですか？

東京からこんな小さな町に来ることさえかなり辛かったのに。今度は、村(village)に私たちを住ませようとするのですか？

母は、東京の名家出身でした。東京以外の生活は受け入れがたいものだったのです。彼女にとって、唯一長崎に来ることを受け入れた理由は、はとこが長崎市内にいたからです。はとこのご主人は軍の外科医でした。母は、続けて、

—— しかも、私たちはいつだって「よその」(yosomono)なのよ。わかる？

—— 空襲を避けるのには市内よりもいいだろう。

この言葉は母を納得させました。こうして、私たちは浦上谷に移っていったのです。皮肉にも、原爆はこの地区に落ちました。私たちが生活していた小さな町は原爆によって破壊されたのです。

(Shimazaki, 2005 : 31-32)

Uragamiについて、village, valléeという表現、土地の記憶としては原爆が落とされたことのみであり、キリシタンの住んでいた地区というコノテーションはない。しかし、Uragamiという地域名を日本のソトに出した意味は大きい。

2. 遠藤周作『女の一生』第一部キクの場合

遠藤周作(1923-1996)はカトリック作家として活躍し多くの作品を上梓していることは周知のことである。カクレキリシタンの歴史はもとより、神父側の苦悩をも描いた『沈黙』は篠田正浩監督が1971年に、スコセッシ監督が2016年に『沈黙—サイレンス—』として映画化されている。その映像からは、「崩れ」に至るまでの残酷な行程が荒々しくも美しい外海の海とともに描かれる。1974年

に出版された『切支丹の里』では、地理的考証、歴史的考証、カトリック教徒としての自身の経験を踏まえ、相変わらず謎の多い「かくれ切支丹」の宗教的特徴について考察を行う。浦上にも触れ、「長崎の人に聞くと浦上村というのは、昔、長崎市民から一種、蔑みの眼でみられていたらしい。それはおそらくこの村が貧しい上に、禁教切支丹をひそかに信じていることが、ほのかにわかっていたからかもしれぬ。だが、その蔑まれた小さな村の受難の歴史に私は非常に興味がある(遠藤, 2016:115)」と述べ、作品創作への意欲がうかがえる。

1981年に朝日新聞に小説『女の一生』の連載を開始する。1986年3月新潮文庫から『女の一生 第一部キクの場合』『女の一生 第一部サチの場合』の2部作品として出版される。一部ではプチジャン神父がカルカソヌ号で来日した幕末の時代から禁教の高札が撤廃するまでが設定され、場所は長崎と浦上、またキリシタンたちの配流の土地、津和野も含まれる。小説はまず、「現在」に生きる語り手、遠藤周作が登場人物の二人ミツとキクを紹介する。彼女たちの生まれた馬込地区を1980年代(執筆する「現代」)の浦上の風景に重ねる。

もっとも現在では、車やトラックの錯綜する味気ない国道だが、ミツやキクが生れた頃は
このあたり、海がそばだった[...].

(遠藤, 1986: 6)

馬込郷は唯一非キリシタン村である。遠藤は『沈黙』で転んだ神父側の苦悩を描いたように、この小説でも、浦上ではマイナーな存在である馬込郷の人々を主人公とした。馬込郷の農家の娘キクが、中野郷の「クロ」²³と蔑まれた清吉に恋をする。奉行所の役人に騙されて、自分の身を売りながらも清吉の救済に努め、最後は南蛮寺(大浦天主堂)で血を吐きながら聖母の前で亡くなる。そして、彼女を騙し続けた役人がキリスト教徒になり懺悔

する、というのが大きなフレームだが、そこには、浦上のカクレキリシタンと彼らを探し続けたプチジャン神父、そして彼らの出会い「信徒発見」、その後の「崩れ」で津和野に配流され、拷問のような仕打ちを受ける清吉をはじめとする浦上キリシタンの歴史が語られる。また森(2008)が指摘したように馬込の住民には奉行所からキリシタンを偵察する役割が課されていたが、キクの兄、市次郎は中野郷のキリシタンの偵察の役割を奉行所から旦那寺である聖徳寺を通して課されている。

長崎の場面では、遊郭「丸山」²⁴の描写、アチャさんの描写(崇福寺)²⁵や、南蛮寺の建設の様子、長崎の祭り(ペーロン、凧揚げ)などローカル色が生き生きと浮かび上がる。一方で浦上は、長崎とは対照的に貧しく、静かな農村地帯である。浦上と長崎は二項対立的な存在として描かれる。浦上にはそれぞれの郷を隔てる身体的な存在としての川と心理的な境界線としての川²⁶があった。「クロ」が意味するものを知らないキクたちは、得体の知らないもの、なにか悪いものとして「クロ」を理解するような道徳観念を植え付けられている。ある日、興味本位で一線を越え中野郷に入った彼女たちは、「自分たちの馬込郷と何ひとつ違いはない」ことを知る。

また、浦上の様子について語り手は、

浦上村は長崎の人間には言いようもなくくさい村だと思われていた。それはこの村で飼う家畜の臭いのせいだった。特にこの頃、長崎に住む異人たちのため山羊や豚を飼うようになってから、その臭いがいっそう強くなった。

(遠藤, 1986: 212)

と嗅覚から、浦上の特徴を読者に与えている。

このキクとミツの生まれた浦上村と長崎との分断の様子が克明に明かされたこの小説から「世界遺産」のストーリー前後の浦上の生活を想像する

ことができる。ただし、ここでも「部落」であった浦上の歴史は示唆されることはない。

語り手(作者)は『女の一生』は私の心の故郷である長崎への恩返しのつもりで書いた作品である」と述べるほど長崎への愛着が深い。また、この小説の執筆中に二度の長崎調査を行っている。「現在」の風景と比較する声(ナレーション)が途中で入るなど、読み手は観光しながら、あたかも自分もまた長崎にいて、主人公を実際の「場所」に投影して楽しむような、いわゆるコンテンツ・ツーリズムをしているような感覚が作り出される。それゆえ、「部落」であったという描写は現在の浦上への偏見を招いてしまう可能性もある。またこの小説の本質である宗教性とは異なるテーマへと脱線することを危惧したのかも知らない。カトリック教徒であり、フランス文学者である語り手は、キクが最後に対峙した南蛮時(大浦天主堂)のマリアに涙を流させる²⁸。現実には大浦天主堂のマリア像から涙が流れたという奇蹟はない。19世紀のマリア出現を意識した設定であろう。しかしながら、

〔キクが死ぬ間際に南蛮寺に向かう場面〕

坂の頂にたどりついた時、力つきたような気がした。烈しく咳をして彼女は土塀にもたれ、息を整えた。彼女がその時、もたれた土塀は今ではもう東急ホテルの一角に変わっている。しかしその寺はありし日の面影を半ば残している。(前掲書、562)

と、土塀という現実の風景の中に「キク」を投影させる。この土塀をみる読者は、「キク」を見出すことになるが、架空の世界を現実に取り込む文学散歩の楽しみ方を遠藤は誘っているようである。

3. 青来有『聖水』

青来有(1958-)は長崎出身の郷土作家である。

むしろ「浦上作家」である。定年まで長崎市職員(定年時は原爆記念館館長)であり現在は長崎大学核兵器廃絶研究センター(RECNA)の客員教授である。2001年に『聖水』で芥川賞を受賞している。青来は遠藤周作や林京子²⁹のように「当事者」、つまりカトリック教徒、被爆者としての視点から作品を紡ぎださない。長崎の一市民として自身が育った場所の風土としての、キリシタン文化や最後の原爆被災地を織り込む。田中(2004)は青来の作品に関して、観光や産業や大衆メディアと一体化し、すでに記号やコピーのように類型化した素材を、解体し再構築し、現在を生きる人々の問題として前景化していること、さらに、過去・現在・未来という時間軸と長崎という空間軸とを交差させ、心や感性の今を生き生きと浮上させていると分析する。

(『聖水』のあらすじ)

浦上天主堂の裏手の丘の上の荒廃した土地(棄教した上に仲間を裏切ったウノスケの末裔がかつて住んでいた)に、末期がんを宣告された地元スーパーの創業者がかつて住んでいた家を改修して住む場面から始まる。スーパーを継ぐために福岡の銀行を退職した息子と父が役員として呼び寄せた幼馴染みでもあり従弟でもある男(佐我里)との交流が主軸となる。佐我里は奇蹟のミネラルウォーター「聖水」の発見者・販売者であり、オラシヨ(キリシタンの祈禱)を復活させ、それを唱える教祖である。聖水のおかげで口の中のおできが一瞬で治った奇蹟が語られる。末期を自覚する創業者は、聖水の効能を信じ、創業者の妻も奇蹟を疑わない。息子は、かれらの行動を疑念する。偶然訪れた外海の岩礁で単なる湧き水が佐我里の手法によって聖性を帯びるからくりを知る。しかしながら、「いつのまにか水に聖性を求めはじめていた自分を発見」する。ウノスケの末裔の一族が見守る中で、危篤の父の望み通り(佐我里)の信奉者

の集団がオラシヨを唱える。聴いているうちに、奇蹟やオラシヨを否定していた息子の心に変化が生じる。

具体的な地名で場所が示されるのは浦上天主堂、原爆公園、路面電車の停留所の松山と赤迫であり、「浦上」地区である。小説ではあるが少なくとも浦上地区という具体的な場所が浮かびあがることで、虚構性が薄れ、聖水にまつわる話にも現実味が帯びる。主人公たちが住む場所は

斜面地のこの場所には、昭和の初めには六棟の平屋が並び、小さな集落を形成していたという。古くは潜伏キリシタンの隠れ住む山里であり、明治3年のキリシタン弾圧で森に流罪となった「山村卯之助」という人物も、ここで生まれ育っている。ウノスケの末の住処として、この土地が今にも伝えられているのは、彼が流刑地の萩で最初に棄教したばかりか、役人に加担して同じ浦上の郷村の出身者たちに拷問をくわえたことによるらしい[…]

(青来, 2004: 252)

と説明されるが、ウノスケ話はキリシタン史には登場しない。郷土作家であり、浦上に住んでいた青来は多くの土地にまつわる民話を聴いて育ったのだろう。民話でしか語られることがなかった、つまり「ソト」に出る機会のなかった民話を自作に組み込み、浦上逸話として土地の記憶の掘り起こしをしているのかもしれない。他にも、

フネさんという婆さんが、昔、あの墓地で、和服姿の女の人が十字架にかけられているのを見たと言って騒いだことがあった。占いをする人で、浦上の信者が神父さんに隠れて夜中にこっそりうかがいをたてにきていた頃もあった。教会の鼻が赤い神父さんが、そんな信徒たちに、あれは迷妄だ、邪教だと怒って

おったなあ。

(前掲書: 275)

など、浦上にまつわる語りが披露される。青来は2017年秋号の『季論21』で、『「長崎」と「浦上」』のタイトルでエッセイを掲載している。

かつて旧長崎村に住んでいた人々は、浦上をどんなふうに意識していたのだろう。戦前、長崎市南部の斜面地に住んでいた母方の祖母が、深夜、家に帰る途中で路地の地藏堂に角隠しに白無垢の花嫁が立っているのを見た話を聞かされたことがある。花嫁がふりかえるとヒトダマとなって浦上に飛んでいったという。斜面地の路地に地藏堂は今もあり、赤い前掛けをつけた地藏が祀られている。どこか耽美なこの怪奇譚の背景はまるでわからないが、ヒトダマが飛んで行った方向が「浦上の方」というところに人々の意識の古層がかいま見えるように思える。「浦上」はヒトダマが集う異世界として畏れられた時代があったのかもしれない。

(青来, 2017: 118)

と述懐する。すでに「パリ外国宣教会」とフランスでのルルドの「マリア出現」に触れたが、『聖水』ではマリア出現、奇蹟、聖水、ルルドを投影する装置が準備されている。佐我里が売り出したミネラルウォーター(聖水)は外海地区の出津の海岸へ続く崖から湧き出る地下水であり、「ルルド」の水として登場する。

まもなく、斜面がV字に深く穿^{うが}たれた場所が見えてきた。抉^{えぐ}れた斜面から無数の水滴が零^{こぼ}れ、それぞれが雨垂れのように降り注ぐ下方には、石を積み上げてあつらえた小さな堰があり澄んだ水が溜まっていた。V字に抉れた、その最深部に、胸で手を合わせて空を仰いだ聖母像が建立され、顎から水滴が滴っている。

(青来, 2004: 293-294, ルビは筆者加筆)

しかしながら、主人公(息子)があまりにその水量が少ないため、疑問を呈すと、販売するための「聖水」は、源流が同じとされる地下水を汲み上げたものであった。その水を高額で売っていたことが明かされる。フランス・ルルド市の聖水の場合も、洞窟の滴る水では、年間600万人訪れる巡礼者(観光者)には足りない。水道システムになっており、無料で好きな量だけ持ち帰ることができるが、それを販売することはできない(羽生, 2020)。

VIII—おわりに

の地区という記憶は積極的に掘り返すべきではない記憶であり、土地の記憶の取捨選択が迫られる。江戸時代以前にイエズス会の土地になった浦上は長崎の人にとってもともと「ソト」の地であった。キリシタン史や原爆の歴史を担う浦上は現在の長崎市内の人々にとって「ウチ」と「ソト」の両義性をもつ場所なのだろうか。「長崎ルルドに行こう」の参加者が地元の人々であり、「知らなかったから」というのが参加理由であったことから、現在でも「浦上」は相変わらず長崎の人にとってはなにか異質な場所なのだろう。

2つの土地の記憶が重なるのが「原爆」である。
それにもかかわらず、永井博士の思想、のちに長
崎名誉教授の高橋眞司が名づけた浦上燔祭説は
「長崎」との融合を拒むようであり、戦後75年が
経過した現在でも「周縁化する浦上」を印象づけ
ている。

〔付記〕

この研究はJSPS科研費19K12588の助成を受けたものです。

注

- 1 出島・長崎湾を楽しむコース，グラバー園，南山手周辺を楽しむコースが上位に掲載されている。https://www.at-nagasaki.jp/model/（2022年1月10日閲覧）
- 2 キリシタンの教会暦を操る最高責任者。
- 3 日本の本土に上陸することなくフランスに帰国した。のちに、ルルドでベルナデットに会い、ヌベールの修道院行きを勧めた。
- 4 バリ外国宣教会の神父。琉球滞在後1863年に長崎に赴任。長崎にて没。キリシタンの存在を信じ続けた。
- 5 浦上にある秘密礼拝堂を日本人に変装して巡回するフランス人宣教師が写真に残っている（バリ外国宣教会の本）。
- 6 1830年バリのバック通りの聖堂で、マリアの出現に立ち会った。聖母から自分（マリア）を型取ったメダイを作るよういわれ、鋳造されたのが「奇蹟のメダイ」である。1832年のコレラ禍では、多くのメダイが流通し、奇蹟譚も付随された。今日では、多くの観光客や巡礼者が「奇蹟のメダイ」を求めて、カトリック・ラブレが眠るバック通りの教会を巡礼する。
- 7 https://www.drimki.fr/actualites/les-villes-les-plus-touristiques-de-france（2022年1月20日閲覧）
- 8 タルブとは、フランス南西部オート・ピレネー県の県庁所在地である。ローランス司祭はルルドに鉄道を通すなど、巡礼地ルルドの形成に尽力したと言われる人物でもある。
- 9 バリ外国宣教会も奇蹟のメダル教会と同様にバック通りに本部がある。
- 10 『人物による日本カトリック教会史』池田敏雄著，中央出版社，1968年，pp.95-98
- 11 1868年来日。外海へ赴任してからは布教活動とともに、女性が自立するための社会活動や診療所、マカロニ工場などを建設した。
- 12 女性の自立のためにド・ロ神父は尽力したが、独立型のマリア（ルルドのマリア）と関係があるのかもしれない。
- 13 マリア像の位置、洞の形態、材料、水の有無、ベルナデットの有無、位置、献堂年など。
- 14 バリ外国宣教会のフランス人神父が人目を忍んで布教活動を行った五島のルルドも同様であろう。
- 15 「さるく」のガイドさんからいただいた資料。
- 16 http://www.city.nagasaki.lg.jp/nagazine/hakken08036/index2.html（「長崎webマガジン」のサイト。2022年1月5日閲覧）
- 17 ブログ等で、東京のルルド紹介があり、スビリチュアルズボットとして記載されることが多い。
- 18 参加者は私一人であり、70代（と思われる）男性ガイドさんと筆者の二人で「さるく」した。本来なら、原爆関連の場所を中心にさるくははずだったが、参加者が一人ということもあり、キリシタン関係の場所を中心に訪ね、説明をしていただいた。
- 19 馬込と長崎の距離感は遠藤周作『女の一生』のなかで「朝早う出ても、馬込に帰れば昼すぎたい」と表現されるほど離れていた。
- 20 ガイドの話。
- 21 1951年に長崎市長に当選した田川務市長は保存に前向きだったが、1955年に訪米した際、保存を訴えるものと期待した市民も多かったらしいが、帰国した市長は、突然、対米関係を重視して浦上天主堂保存に対し消極姿勢になった（ガイドもこの経緯について疑問を呈していた）。
- 22 Shimazakiは浦上をUragamiと表記している。
- 23 カクレキリシタンのこと。
- 24 崇福寺は、1629年福州地方出身の長崎在住唐人が中心となって創建した寺院。アチャさんとは、中国人のことを示す。
- 25 大浦天主堂のこと。
- 26 「中野郷や本原郷に入る境界には細い流れがあった。浦上川の支流がそこを流れているのである」（遠藤1986：pp.25）の表現から。
- 27 「用もなかとに中野郷の者がこらへんば、うろうろ、すんな。クロの奴は俺、好かんと」（前掲書：pp.21）の表現から。
- 28 「用もなかとに中野郷の者がこらへんば、うろうろ、すんな。クロの奴は俺、好かんと」（前掲書：pp.21）の表現から。
- 29 1930-2017。爆心地近くで被爆したが奇蹟的に生き延びた。当事者の不安、死への恐怖などが紡がれる『祭りの場』で芥川賞を受賞。
- 30 原爆の被害状況は市内で格差があった。長崎中心部では「諏訪神社が守ってくれた」と言われたほどに被害が小さなおところもあった。カトリック教徒である永井博士は、（おそらく）それに反応するかのように、投下された地域であり、キリスト教徒の多い浦上の人々に向かって、被爆者とは「汚れなき子羊の燔祭」である等を発言し、キリスト教徒からも反発があった。

文献

- ✧池田敏雄（1968）『人物による日本カトリック教会史』，名古屋：中央出版社
- ✧遠藤周作（2016〔1971〕）『切支丹の里』，東京：中央公論新社（新装版）
- ✧遠藤周作（1986）『女の一生 一部・キクの場合』，東京：新潮文庫
- ✧岡光（2008）「「長崎さるく」にみる観光資源の再発見」，文化環境研究，pp. 82-91.

- ❖ 片岡弥吉 (1963)『浦上四番崩れ——明治政府のキリシタン』東京：筑摩書房
- ❖ Shimazaki Aki (2005) *Tsubaki in Le Poids des Secrets I*, Paris, Actes Sud.
- ❖ 青来有一 (2004)『聖水』, 東京：文藝春秋社
- ❖ 青来有一 (2017)「「長崎」と「浦上」」, 『季論21』(38), 本の泉社. pp.118-120.
- ❖ 関根浩子 (2016)「ルルドの聖洞窟模型の日本における展開——長崎大司教区の築造例を中心に」, 崇城大学芸術学部研究紀要(10), pp3-34.
- ❖ 竹下節子 (2019)『女のキリスト教史——「もう一つのフェミニズム」の系譜』, 東京：筑摩書房.
- ❖ 羽生敦子 (2019)「コピー版ルルドの一考察——長崎を事例にして」, 第35回日本観光研究学会全国大会, pp. 353-357.
- ❖ 羽生敦子 (2020)「巡礼地から観光巡礼地に至る変遷の一過程について——ルルドを事例として」, 白百合女子大学言語・文学センター, pp.37-55
- ❖ 蛭川順子 (2016)「出現と痕跡——パリ外国宣教会を手がかりに」, 関西大学東西学術研究所, pp.163-188.

- ❖ 森顕登 (2008)「原爆は人に何をもたらしたのか——地理的関係からナガサキを解釈する」早稲田社会科学総合研究, 別冊 2008年度学生論文集, pp. 29-41.
- ❖ 吉田修一 (2020)『長崎』(吉田修一コレクションIV), 東京：文藝春秋.

[URL情報]

- ❖ 長崎さるく
https://www.saruku.info/wpcontent/uploads/2020/11/2021_gakusaruku_newyear.pdf(日本語, 2021年4月9日閲覧)
- ❖ ハフントンポスト
https://www.huffingtonpost.jp/2018/08/08/urakami-church-history_a_23498823/(ガイドも同様のことを語っていた)
- ❖ 『日本経済新聞』2018年6月30日配信
<https://www.nikkei.com/articleDGXMZO32467060Q8A630C1MM8000/>(日本語, 2021年3月20日)
- ❖ 朝日新聞社(永井博士写真)
<https://www.asahi.com/articles/photo/AS20210430003117.html>
 (2022年1月3日閲覧)

